

■「おうち」で死ねる社会に

「独居」はやってみると親にとっても子にとってもラク

上野千鶴子さん（社会学者）



現場を歩いてきた経験から断言しますが、施設や病院に進んで入りたいお年寄りはいません。お年寄りは住み慣れた「おうち」が好き。でもそれは「家族と一緒にいたい」という意味と同じではありません。自分以外に誰もいない「おうち」でもおうちが好き。目をつぶっていても、電灯スイッチの位置がわかるとか、住まいとは身体の延長のようなものです。

施設を選ぶお年寄りは、子どもに迷惑をかけたくないという理由から。

親を施設に入れる子どもは自分の「安心のため」。親の幸せのためではありません。

いま、独居高齢者の数が増えています。2017年の厚生労働省の調査では65歳以上の高齢者世帯のうち、独居世帯は26・4%、独居予備軍の夫婦世帯は32・5%です。以前は死別してひとりになった親を子ども世帯が呼び寄せて同居するケースが多かったですが、独居になっても世帯分離が定着してきました。それ以前から世帯内での家計分離が起きていました。この変化のスピードは私の予想を超えています。

理由は単純です。「独居」はやってみると親にとっても子にとってもラクなことがわかってきたから。「在宅」をめぐる市場が生まれ、人材と資源の供給が分厚くなり、経験やノウハウが蓄積されてきた。ハードルが高いとされてきた独居の「在宅看取り」もできるようになった。本人の意思さえはっきりしていれば、家族の介入がない方がやりやすいという声も現場から聞かれます。

ただお年寄りが望むように死ねる社会ではありません。9月に亡くなった俳優の樹木希林さんが16年に広告で「終活宣言」した「死ぬときぐらい好きにさせてよ」は注目を浴びました。裏を返して言うと、好きに死ねない社会だからこそ響いたのでしょう。

超高齢社会では死に方が変わってきました。高齢者の死はゆっくり死。がんをはじめ死期が予想できるようになった。認知症もゆっくり進みます。

「臨終に立ち会いたい」と思い込まなくてもいい。私は「看取り立ち会いコンプレックス」と呼んでいます。死を予期する時間は十分あるのだから、別れと感謝はその前にしておけばいい。

在宅看取りのためには医療と介護の一体運用が必要。国は社会保障費削減という不純な動機から在宅医療を推進していますが、多くのお年寄りは「おうち」での最期を望んでいます。動機は違っても呉越同舟で同じ方向に向かうのは悪いことではありません。

現場で強調されているのが高齢者の意思決定支援。本人より家族の意思が優先されがちでは、「好きに死ねる社会」は実現しません。（聞き手・高久潤）

*

うえのちづこ 1948年生まれ。NPO法人WAN理事長。独居の高齢者に注目した「おひとりさまの老後」がベストセラーに。